

日本語助辞「は」の本質 (一)

山内 啓介

はじめに

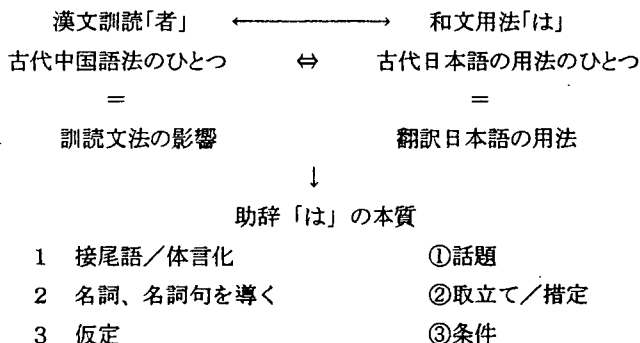
日本語助辞「は」が表す文法機能は格の機能レベルの論理関係を含め統語機能を超えた用法がある。表現のレベルでとらえても、文法機能を覆うため、峻別して議論することは困難かつ不明瞭になった。その表現のレベルの説明は意味の解明にとどまってきている。「は」の用法は文法機能の本質を捉えなおして説明を試みるとわかりよいと考え、その機能の成立を見直そうとする。

日本語は古典語において草仮名で表記されていたことは周知のことである。時代が下って、その仮名書きに変体仮名と呼ぶ文字種を多く生み出している。上代仮名で使われた字種に着目して、助辞「は」に使われた字母の中に「者」字を用いる仮名の用法が見える。「は」が「波」字の崩し字であることは明白なことと思われるが、「者」を崩して用いていた事実は字音から見れば興味深い。

変体仮名について、文字種によって書写する、書き手による表記意識を探る試みから、文法的使い分けに踏み込むものはない。書き分け意識を持たなければならないほど、文字種よっての表記意識が働かなかったためである。「波」字と「者」字に発音を「は」とする、現代語音韻で同じ/wa/とする限り、数種の字母についても意味機能を与える書き分けはなかったとするのが一般である。

しかし、「は」の文字種に「者」を含むのは、字音によるのではなくて字訓によるという事実を認め、それを漢文訓読による「者」字の文法機能を意識していたために、音表記に用いられていたと推測を立てることは可能なようである。したがって、日本語の助辞「は」を表記するために漢文を訓読する際の「者」字の用法が影響して訓となった、と仮説を立てることができるので、それを述べたい。

日本語助辞「は」の表記に中国古代語の文章を訓読する表記が用いられたとする事実は、日本語に「は」が用いられる場合の文法機能と、中国古代語を翻訳する際の「者」字の用法が一致したのである。助辞「は」の本質として日本語をここに説明しようとするのは、文法の格機能の代表的な助辞「が」を意識し定着するとされる以前からあった日本語のひとつの用法だったからである。



1 「は」と表記

日本語文法の助辞「は」は文法機能語である。名詞に下接して文の要素として働く。いわば、その本質は措定の助辞の用法として見られる。古典語の用法に取り立て助詞とされるのは漢文の注疏を読み下す語法から、日本語の文法機能語として影響を受けて成立したのである。国語文法の助詞「は」と「が」の用法の違いを説明するため、その本質を問う。

本稿は、次のふたつのきっかけを背景とする。ひとつは、歴史文書の輪読会を経験した折のことである。大学院生のころ、漢文資料での慣用的に読み下す「…は…てへり」の口調を不思議に思ったことであった。漢文の措辞で「者」字が出てくると決まって読むようである。通行の字音ではない「てへり」は「といへり」と読む表記である。注疏に顕著であった読み下しは、脈々と伝えている。

いまひとつは、その後、時を経て、日本語教育の研究例会でのこと、ある発表者が助詞「は」について、字母のひとつに「者」と書くのはなぜかという疑問につき、そのときの会場にたずねた。筆者が漢文書きの訓読に出てくることを指摘したことがあり、仮名の字母に「波」をあてていることは説明をせずとも類推できるが、それと同じ読みを仮名書き文献で「者」の字にもすることを答えた。

このふたつのことは、それからそのままになっていた。しかし、日本語の文法助辞で「は」と「が」の機能比較をするときに絶えず気になっていたことであった。共時論の展開において、文法家たちが助詞「は」と助詞「が」の分析を格レベルの議論と表現レベルの議論を交えながら展開していることが多く、その表現法を文法分析にする議論の解決のための整理が必要であると感じてきた。

通時論で現代語を処理することを近代言語学の祖は戒めたが、文法の議論に日本語助辞「は」の本質を用法に捉えるべく、「は」を用いた語法の機能の視点を提案するものである。国語辞典、文法辞典などに解説されてきたことでもあるので、よく知られた事実を理解することで、助辞「は」としての、この「者」の字からの視点を、本稿では明らかにすることができればよいと考える。

2 その用法

現代の日本語の「は」と「が」の用法で整理されるのは次の例である。

- (1) わたしが日本語を話します。
- (2) 日本語はわたしが話せます。
- (3) 日本語はできますが、中国語はできません。
- (4) 中国語が難しい。日本語には興味があります。
- (5) 彼は英語では話しても、中国語では話しません。
- (6) 雨が降ります。
- (7) いわば地球が主で、月は従です。
- (8) 地球というのは丸い衛星です。

主語述語の文を単位として動作主体の主格を表す「わたしが」の「が」に対して、「わたしは」とすれば話題化が行われる。同様に、「日本語を」と述語動詞部にある目的格を話題化したときに「日

本語は」となって、文頭に位置して語順を変える。このように主格「が」、また目的格「を」を取る名詞を、(1)から(2)のように話題にすると、一般に強調の表現としるのが助詞「は」の働きである。

日本語と中国語を対照して「日本語は」「中国語は」と指示して(3)のように表現すると、この「日本語は」では「わたしが日本語を話します」を、あるいは「中国語は」では「わたしが中国語を話します」を、意味していることになる。つまり、日本語を話します、その日本語はできます、という意味の構造となる。同じく、中国語を話しません、その中国語はできません、となると言える。

「は」と「が」のそれぞれの用法を簡潔にして、おおかたをまとめると次のようになる。用語としての助詞の用語をそのままに用いる。

文法分類	品詞	は	副助詞または係助詞	が	格助詞また接続助詞	
	意味	は	話題、提題	とりたて	が	主格標示 文の接続
	職能	は	格助詞の代行	文末指示	が	主語の提示 単位文の接続
	文と語	は	複文の構成		が	省略あり 語構成をつくる
	表現機能	は	対照 強調 措定 既知		が	特立 排他 存在 未知

3 和文から

竹取翁の物語は、古代伝承の万葉集にある引用説話から始まり、源氏物語に名をとどめる。しかし、竹取物語としての本の成立とそこに書記された言語現象には時代性があり、『竹取物語の国語学的研究』¹⁾に見られるように一概に扱うのは資料として難しい。そこに見える次の用法をおおむね中世の国語資料としてあげると、文章に表れる「は」がある。

[資料1]

その中に猶言ひけるは、色好といはるゝ限り五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名、一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂、只この人々なりけり。

(下線筆者—以下同じ) <竹取物語²⁾>

物語の冒頭に「今は昔」で始まる有名な語りがあり、日本語の古語で取り立てとして説明される助詞「は」の用法である。資料1の例文冒頭のように名詞句になりうる引用を見ても、この用法には特徴がある。文章には漢文で書記された言語の影響を直接的に指摘する場合もあり、「あるは」に対する「あるいは」の読み慣わしの表記例が次の例である。

[資料2]

日暮るゝ程、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌を誦ひ、或は唱歌をし、或は嘯を吹き、扇を鳴らしなどするに、翁出でていはく、「辱くも穢げなる所に、年月を経てものし給ふ事、極まりたる畏まりを申す。『翁の命けふ明日とも知らぬを、かく宣ふ君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ』と申せば、『深き御心を知らでは』となむ申す。さ申すも理なり。『いづれ劣勝おはしまさねば、ゆかしき物見せ給へらむに、御志の程

は見ゆべし。仕うまつらむ事は、それになむ定むべき』といふ。これよき事なり、人の恨もあるまじ」といへば、五人の人々も、「よき事なり」といへば、翁入りていふ。赫映姫、石作皇子には、「天竺に佛の御石の鉢といふ物あり、それをとりて賜へ」といふ。車持皇子には、「東の海に蓬莱といふ山あり。それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。今一人には、「唐土にある火鼠の裘を賜へ。」大伴大納言には、「龍の首に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。」石上中納言には、「燕の持たる子安貝一つ取りて賜へ」といふ。

<竹取物語³⁾>

翁の伝説は求婚者の登場に話題を代えて伝えられ、名を取り出しての展開は、資料 2 のように「には」と相手の存在を位置して捉えて述べ立て始める。上記例には「ば」の用法にも注目をすべきであるが、いまは、ここに和文に現れうる話題化とする例を見るだけで十分であろう。文章構造に置き換える文法分析を必要としているのである。

4 助辞「は」の問題点

用語に助辞の語を使うのは文法を形態分析するときの術語である。これまでの国語として文法で助詞の説明をすると、その用法を一覧の範囲で、ほぼ尽くすことができる。さまざまな文法解説によれば、そこには助辞「は」の整合性を求めた内容を見ることもできる。助辞とは、接辞のうちで文法機能において、語と語の関係を主としてなう形態である。

助辞「は」の文法機能の問題は、次の説明⁴⁾にある指摘に始まることである。従来の国文法の説明では次のようになる。

山田が用言と陳述の関係をどのように見ていたか、簡単に触れる。山田は文を終止させる用言は陳述を持つ、とした。この陳述は係り結びの現象と深い関係にあり、「結び」とはすなわち陳述であり、「係り」とは陳述との呼応関係であるとした。連体修飾の用言は陳述を担わないため、係りはそれを超えて文末に影響する。例えば

鳥が飛ぶ時

では「鳥が」は係助詞を持たないため、連体修飾句の中に影響がとどまるが、

鳥は飛ぶ時

では「鳥は」が係助詞「は」を持つため、連体修飾句を越えて文末の陳述に影響する。

この文法機能の着眼は係り結びの現象と陳述の成立にあったのであるが、連体修飾とした文の構造は複文における主述関係にとらえられ、さらに「は」は文を超えた結びつきにも指摘されるようになっていく。文の単位だけの議論では収まりきれない問題を提示した、この事実は、「は」の機能の本質にかかわるだけにその後の議論の問題となっている。

5 漢文訓読の用法

助詞「は」について文法の働きを取り上げて説明することは、文法論における単位文をみて、そのなかで格関係を重視した用法の解説となるからであろうか、その機能を解説するにもかわらず、辞書などにも現代語で係助詞とするか、副助詞とするかは、分別し得ないところがある。本来の用法に構文的職能と意味を付与する機能が文レベルと文章レベルにあったのである。

助詞「は」の淵源を漢文の語法の影響に見ようとするので、次に漢文の読み下しを説明することと、辞書項目における取り上げ方を見ておくことにする。

[資料3]

原文の漢字は原則としてそのまま使用するが、次に挙げる漢字は平仮名で表すこと。(文語文法の助詞・助動詞に当るものは平仮名にする、と言うのが基本です) □再読文字で、二度目に読む部分。□「者」を「は」と読む場合。⁵⁾

[資料4]

稷^ハ思^フ天下^ニ有^ラハ^シタル者^ニ、由^ホ己^ノ之^ヲを^シムルガ^レ之^ヲ。

(稷は天下に飢たる者有らば、由ほ己の之を飢へしむるがごとしと思ふ。)⁶⁾

[資料5]

光陰者百代^ノ過客也。而^{シテ}浮生^ハ如^シ夢^ノ。

(光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の如し。)⁷⁾

わかりやすく漢文の句法を紹介する辞書から、「者」字について解説するのを引用⁸⁾する。

漢文用例を省略して挙げる。

句法1 ①動詞や助動詞の後に置き、それらを体言化して、人・事・物などを表す。「もの」「こと」と訓読する

②形容詞の後に置き、体言化して人や事物などを表す。「もの」と訓読する。

③名詞や名詞句の後に置く。多くの場合、主語であり、それを取り立てて提示することで判断を明確にする働きをする。「…は」と訓読して、「…のものは」「…とは」と訳す。ふつう、文末に断定の助詞「也」を用いて呼応させる。

漢文訓読の句法で「者」字について、「は」と読み下すことを解説している。この用法を古文での係助詞の用法との対比で見ると、共通するところが見られる。和文と漢文の訓読を日本語の語法において峻別しようとするところから、これを古語の説明に援用することがない。漢文訓読の語法を成立させてきたゆえんである。

6 「は」を「者」と書く

変体仮名の「は」には「者」字を字母とするものがある。おおくは字音から草仮名の崩し字としていますが、そのなかで「者」字を音表記に用いるのは特異である。かな文字の字母または字源としての解説で、すべてが説明できない例があるとして、これについて触れるところは見られない。ある前提を想定すれば、仮名字体表に見られるように、周知の事実であったということであろう。

これについて一覧するものがあり、辞書の項目にしているので、日国オンライン⁹⁾から解説すると

ころを示すと次のようである。

字形は次のようである。



「は」の字形は、「波」の草体から出たもの、「ハ」の字形は、「ハ」(または「半」の初二画)を用いたものである。変体がな、異体がな、万葉がなについては仮名字体表を参照。

仮名字体表は、次のようである。字体の影印を略した。

[資料6]

波		正倉院蔵万葉仮名文書消息文
波	者 破	秋萩帖
波	者 盤	高野切れ
波	者 盤	万暦校本万葉集
波	者 盤 八 半	河内本源氏物語
波	者 盤 八 半	東松本大鏡
波	八	育溪書屋本土佐日記
波	者 盤 八 半	梅沢本古本説話集

(作成指導 中田祝夫)

万葉仮名で使用する「は」の字母には20数種を数える。文字の別において一覧するうちでは、字音として音読みで、あるいは訓読みであったと類推をして、「者」字が「は」と読むことは特徴的である。しかし、多くの仮名文字の中で、この文字使用による写本があり、草仮名として伝えられているのである。「者」について、これを字義についてみる。字通¹⁰⁾によると、次のような解説がある。

〔説文〕は字を白部^{四上}に属し、「事を別つの詞なり」とするが、それはものを特定して指す意で仮借の義。

そして用法については、次のように説明をする。

2 ものを特定していう、もの、人にも事物にもいう。

3 ある状態を特定していう、～は、～のときは、～ならば。

さらに、名義抄には読みとして、「ハ」と記されていることがわかる。

[名義抄]者 モノ・ヒト・ミギ・ハ・アニ

この解説からすると漢字「者」の用法には、特定の用法がある。ある状態を特定して言うときの読みには「～は」があることになる。すなわち、字訓の用法であることを意味する。古訓として類聚名義抄に記録するところから、かな文字としての用法が普通に行われた、その読みとしては定着していたと推測できる。

7 古文書の文法

それでは古文書の例として、次に解説¹¹⁾を引用する。

[資料7]

係助詞 者(は)→提示を示す

特に著しい取り立てを必要とする提示には「至…者(にいたりては)」「於…者(においては)」が用いられる。

また、日本史用語に助字¹²⁾をあげる。

[資料8]

【者】～は。～ば。～すれば。「もの」と読んで、人の意。「てへり」と読んで、「と言へり」の意。

この用法については、すでに江戸時代の語学書に解説するものがある。

[資料9] 助辞訳通¹³⁾

江戸中期の語学書。三巻三冊。岡白駒著。宝暦一二年(一七六二)序。漢語の助辞(虚字の一種)二三〇余について、その意味や用法を解説したもの。巻頭の総論で、漢詩の助辞と日本語の助詞を比較論述している。

8 辞書にみる「は」の文法機能についての解説

日本語古語の辞書から、次を引用する。古語の助詞「は」の語誌を載せた嚆矢である。係助詞としての本義を取り立てにおいて、対比すべきを不特定多数と特定有限数から解説している¹⁴⁾。この議論は国語助詞「は」について係り助詞の本義を述べると解説するので、古語辞典における国語助詞「は」についての「本議論」と呼ぶとよいだろう¹⁵⁾。

[資料10]

係助詞の本義は、それが承接している語句を取り立てることである。叙述の中から、その語句を取り立て、最後にそれ以外の語句と関係させるような機能を有し、文に終止形によって終止することを要求するのが原則である。取り立てには、不特定多数の中からの取り立てと、対比されるべき特定有限数の中からの取り立てとの2種がある。(中略)つまり、不特定の中から絶対的に主題とすべきものを取り立て、それについて以下に述べるが如きものであるというのであり、対比は対比すべき有限のものの中から相対的になされる取り立てである。ただし、実際の例においては、いずれの取り立てであるか判然としない場合も多い。

この用法を述べて、主題と対比を示す例を挙げている。辞書項目に解説する例は次のようである。まず、不特定多数の主題を示す場合である。

[資料11]

題目を提示する。

「防人に行く一 [由久波] 誰が背(せ=夫)と問ふ人を見るが羨(い)しきもの思ひもせず<万葉・二〇・四四二五>。

「この官一、腹々に御子官達あまた渡らせ給ひけり」<平家・四・若宮出家>。

「師ノ弟子ニ教エざるわ[voxiyezaruua]コレヲ名ヅケテ破戒トユウ」<ロドリゲス大文典>。

また、特定有限数の中からの取り立ての例は次のようである。

[資料 12]

他と対比し区別する意を表す。

「夜に一 [用瀬波] 九夜 (三) 日に一 [比瀬波] 十日を」<記・中・景行・歌謡二六>。

「人—いさ心も知らずふるさと—花ぞ昔の香ににほひける」<古今・春上・四二>。

「初めより我—と思ひあがり給へる御方々」<源氏・桐壺>。

あるいは、日本語大辞典第2版¹⁶⁾によると、次のように記述する。係助詞を標出項目とし、日本語を通時にとらえて古文の用法を主に記述する。述語との関係で、叙述の題目を提示する連用を対比的に提示する、対比すべき事柄を言外におくことにより強める、そして、現代語の用法をとくに対比する行為の説明として示す。

現代語の用法にも注目をし解説する辞書の項目から、次にデジタル大辞泉¹⁷⁾を見てみる。説明の箇条を、主題提示を意とする、他の事物と対比または取り立ての意とする、強調して明示する意とするなど、「は」の説明を代表してまとめる。辞書の用例記述では、用法について、文法機能としての現代語と古典語を共通して捉えようとしていることがうかがえる。

以上にあわせて、次に大辞林を引用する。補説を記載することで用法の解説を広げている。古典語「は」の例文は現代語の用法に連続すると捉えたことがうかがえる。

種々の語や文節、活用語の連用形などに接続する。多くの事柄の中から、一つのものを取り出して提示するのが本来の用法である¹⁸⁾。

さて、現代語の用法について、統一的に説明をする辞書¹⁹⁾を、次に引用する。項目内容に表される用例も表現としてふさわしくすること、その語学的解説は厳密を期すことと、編者の言葉に見える。品詞解説には係助詞と副助詞との連続性を捉え、係助詞には呼応する文の統一構造を見るが、それを量的な関係に分節するのが副助詞であるとする。

次のようである。

(一) 係助詞

- ① 一つの主題を提示し、判断・叙述を導く。格関係としては代表的に主格・対象格、そして目的格を収める。

▽個別的な具体場の主題。「女よ、なんじ—悲し」「長崎の人形作り—おそろしや」「少女—17になった」「あなたのこと—忘れていた」

①一般抽象場の主題。「…とは」の形をとることもある。「人間—微力なものだ」「食事—楽しくとるものです」「誠実さ—人を結ぶ」

- ② 二つの判断・叙述を対照し、また、その形式において二つの主題を対照的に提示する。

▽対立するものの対比的な提示。しばしば「…は…、…は…」の形をとり、また、対照を理解させる語彙・語法を持つ場合が多い。「西—夕焼け、東—夜明け」「人—冷たしわが

身一いとし」「雨一降る降る、日一薄曇る「今のぼくに一これが限界だ」

④類同するものの対比的な提示。しばしば「「…は…、…も…」の形をとる。「秋の終わりー寂しいが、暮れ行く春も惜しまれる」「雪崩ー消える花も咲く」「海ーもちろん湖にも荒れる日はある」

③(活用語の連用形に、「ては」の形で接続して)さまざまな条件を提示する。

④⑦(連用の文節に下接してその意を強める)「心の底にーそんな考えがあった」「君にーまいったよ」「おまえのほかーにだれもいない」「以前よりー素直になった」「たいてーだめなんだ」「2日ないしー3日まっておくれ」

④(数量の語について)肯定の表現をとって最小限を、否定の表現をとって最大限を表す「期日にまだ10日ーある」「残る者は、もう5人ーいないだろう」

⑤部分的な肯定の構文を作る。

⑦(「…はするが」「…はあるが」「…ではいるが」「…ではあるが」「…ではみたが」などの形で、逆接的に下に続き)その限りー応肯定しながら、実は背反する性質があることを述べる。「生きてーゆくが、つらからう」「くーにへー帰るけれど、ほんのしばらくだ」

④(連用の文節に接続し、否定の語を下に伴って)「は」の接続した文節を否定の焦点とするそうするといっても…ではないの意。さらに下に逆接の句を伴ったり、暗示したりする。「早くー帰れない」「一日中ー降っていないだろう」「あなたにー見せられない」

⑦(述語を分節して接続し、下に否定の語を伴う。動詞述語にはその連用形に接続して下に「しない」、形容詞・形容動詞述語にはその連用形接続して下に「ない」を伴って)その主題の範囲内での否定を意味する「頼まれたからには、退きーしない」「ここからなら遠くーない」「午後になればもはや静かーでない」「それでは一人前の男でーない」

(接続助詞の項目が続くー以下略)

以上のように整理をする。この項目の補足説明では、①と②の⑦とで、主題となるか、対比となるかについて、分説を取り入れた解説をする。この辞書では上位格とする主格、対格、与格は主題にも対比にもなり得るとあって、「必ずしも別ではない」とする。また②⑦と④、②⑦と⑤も、それぞれ別ではないとして、文型から項目を分けたという解説をしている。

9 現代語用法の助辞「は」

国語助詞の本議論で取り立てとする用法は、その後の、現代語の文法議論にも取り入れられて取り立ての用法が解説されている。「取り立ての機能」を持った語のひとつとして解析される現代語の用法に、表現機能における意味的特徴を見て、その取り立て助詞「は」として述べる。それについて統語的特徴、そして表現機能²⁰⁾に触れているのは、次である。

「ハ」の、文中ある要素をとくに際立たせ、ある対比的効果を生じさせる働きを基本と見、それがある条件下で対比の相手である影の存在が意識されず、単にそこに聞き手の注意をとくに惹きつけて、あとの陳述と結びつけるだけの場合を、「(単なる)主題」を表すものとする。

文法論の体系にこの説明がその全体の中でどう捉えられるかは、言語学大辞典の日本語の項目²¹⁾解説で判断するしかない。シンタクスによる分析はさらに進められて、複文とあわせて、その文レベルを超えた分析が求められる。それについては、やはり日本語助辞「は」の本質を解明していかなければならないと考え、日本語助辞「は」の本質に、その視点を持つべく議論を整理してきた。

ここに取り上げたのは漢文脈に現れた「者」字の用法を国語の「は」に訓読した事実であり、それが格助詞「が」の機能をもって説明される構文による文法分析²²⁾の研究以前に、日本語では多く用いられた「は」があることである。日本語の古代での用法がすでに主語に相当する機能を「は」が有していた事実が変わりはないのであろう。

したがって、日本語助辞「は」を主語、主格に相当する機能の分析をすることについて、おおく主題、提題、取り立てによるとする係りの議論を日本語の現象に照らし、引用の用法、名詞を以って人物とする、そして名詞句を標示するなどの用法としてさらに見直されるべきであると結論する。

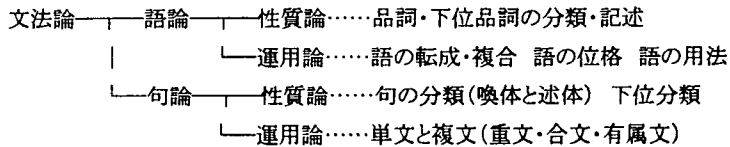
(引用サイトへのアクセスは、すべて 2007 年 10 月である)

注

- 1) 中川浩文「竹取物語における本文の策定(1) 一主として助詞助動詞を中心に一」『女子大國文』昭和41年11月 中川先生による一連の論考がある。
- 2) バージニア大学図書館エレクトロニック・テキスト・センター、ピッツバーグ大学東アジア図書館の日本の古典文学をインターネットで利用可能にする共同事業による公開データ。 <http://historyofideas.org/japanese/taketori/AnoTake.html>
- 3) 注2に同じ。
- 4) フリー百科事典『ウイキペディア(Wikipedia)』山田孝雄の項目。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E7%94%B0%E6%96%87%E6%B3%95>

また、文の分類を山田文法では特徴とした。山田文法の構成が、次のように示される。



<工藤浩「諸家の日本語文法論」『日本語百科大事典』Ⅲ-3 大修館>

<http://blogs.yahoo.co.jp/modarite/11735047.html>

- 5) □「之」を「の」と読む場合。□「與」を「と」と接続に読む場合。□「與」を「よりハ」と比較に読む場合。□「ず」と読む、打ち消しの「不・弗」の字。□「より」と読む、起点を示す「自・従・由」の字。□「なり・や・か・かなのみ」などと読む、終尾詞として使われた時の「也・乎・矣・焉・與・歟・耶・邪・哉・夫・已・耳・爾・而已・也已・已矣・而已矣」などの字。□「る・らル」と読む、受身として使われた時の「被・見・爲・所」の字。□「シム」と読む、使役として使われた時の「使・令・教・遣・俾」の字。 <書き(読み)下し文のきまり>

6) 注5に同じ。

7) 注6に同じ。

8) 解説は次に続く。

④数詞「の」の後に置き、いくつかの種類や事情があることを表す。「もの」と訓読したり、そのまま音読み、「…点」「…種」などと訳す。

⑤存在の動詞「有り」の目的語の後に置き、「有^ニA者^ニ」の形になる。

㊦Aに名詞が入る場合

「Aトイフものあり^ニAなるものあり^ニ」と訓読して、「Aという人(者)がいる」と訳す。

㊧Aに動詞または動詞句が入る場合

「Aスルものあり^ニ」と訓読して、「Aする人(者)がいる」と訳す。

㊨Aに文(主語||述語-目的語)が入る場合

「主語/目的語ヲ述語スルものあり^ニ」と訓読して、「目的語を述語スル主語がいる」と訳す。

⑥比況の動詞「如・若・似」の目的語の後に置き、「如(若)ニA者^ニ」「似ニA者^ニ」の形で、「Aナルものノごとシ」「Aナルものニにル」と訓読して、「Aの(ようすの・さまの)ようである」と訳す。

句法2 ①假定表現の重文で、条件節の後に置き、假定の意を表す。「…バ」「…レバ」と訓読して、「もし…であれば」「かりに…すれば」と訳す。

②因果関係を表す重文で、結果を示す節の後に置き、原因の文を導く。「…ハ」と訓読し「…のわけは」「…のは」と訳す。

句法3 疑問を表す語気助詞として、疑問の代詞「誰」と呼応して用い、文末に置く。「…か」と訓読する。ただし、従来の訓読では「…する人」と解して「もの」と読み習わしてきた。 <全訳漢辞海 三省堂 1136-1137 ページ 2006年3月>

9) Japan Knowledge の会員サイトページにより、引用する。

<http://www.japanknowledge.com/cgi-bin/jkcsearch/common.cgi>

10) 注9に同じ。

11) 係助詞については次を参照。 <http://www.toride.com/~sansui/materials/46-2-5.html#6>
HP は、<http://www.toride.com/~sansui/>、古文書学ノートに古文書の文法を解説する。

<http://www.toride.com/~sansui/materials/mon46.html>

12) 助字 <http://ksbookshelf.com/DW/Nihonshi/NihonshiYA.htm>

<K'sBookshelf 辞典・用語 日本史用語 やへ>

13) 日国オンラインの項目。影印は、次の早稲田大学図書館蔵によるデータベースがある。

http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho04/ho04_01841/

14) 中田祝夫ほか編 古語大辞典 小学館 昭和58年12月 1303ページ。

辞書項目の記述は次のようである。□の終助詞は省略した。

□[係助詞] (種々の語に付く。ある事柄を特に取り立てて強示する意を表す。そこに他

と区別し他の事柄を排除する気持ちがこもる)

①他と対比し区別する意を表す。「夜に一〔用瀬波〕九夜(九夜)日に一〔比瀬波〕十日を」<記・中・景行・歌謡二六>。「人一いさ心も知らずふるさと一花ぞ昔の香にほひける」<古今・春上・四二>。「初めより我一と思ひあがり給へる御方々」<源氏・桐壺>。②題目を提示する。「防人に行く一〔由久波〕誰が背(せ)夫と問ふ人を見るが羨(うらやま)しさもの思ひもせず<万葉・二〇・四四二五>。「この宮一、腹々に御子宮達あまた渡らせ給ひけり」<平家・四・若宮出家>。「師ノ弟子ニ教えざるわ[voxiyazaruua]コレヲ名ヅケテ破戒トユウ」<ロドリゲス大文典>。③(「一ずは」「…く(形容詞の連用形)は)」の形で接続助詞的に用いて)条件を提示する。順接の仮定条件を表す。「いつまでか野辺に心のあくがれむ花し散らず一千代も経ぬべし」<古今・春下・九六>。「わがいはほは三輪の山もと恋しく一とぶらひ来ませ杉立てる門」<古今・雑下・九八二>。「同じう一、念誦(ねんじゆ)をも勤め給へ」<源氏・柏木>。→ずは ④強調する気持ちを表す。「志賀の白水朗(しやがのしみづらう)の塩やく煙風をいたみ(=風ガ激シイノデ)立ち一〔立者〕上らず山にたなびく」<万葉・七・一二四六>。「かく一言ふものか」<土佐・一月七日>。「えならざりける水の、深く一あらねど」<枕草子・二二三>。⑤格助詞「を」の下につ付くときには濁音化して「をば」となる。また、連声で、撥音「ん[n]」の下にくるときには「な」、入声音「つ[t]」の下にくるときには「た」となり、「言ふは」が「言っぱ」と発音されることがある。「今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり」<古今・雑下・九六九>。「行観居士(ぎやうくわんじ)といっぱ、これ観音薩土垂(くわんおんさつち)の御再誕」<謡曲・田村>。「北門な建長寺、寂滅為樂と響き渡れば」<虎明本狂言・鐘の音>。「代物(しろもの)たいか程でござる」<虎寛本狂言・末広がり>。

15) 注14、同上、1926 ページ参照。なお、この議論は辞書に採録する参考文献一覧で1960年ころまでの研究成果による記述であることがわかる。

16) 以下は、日国オンラインより、「は」の項目を引用する。

㊦文中の連用語を受け、述語との結びつきを強める

①体言・体言に準ずる語句およびこれらに助詞の付いたもの、副詞などを受ける。

②叙述の題目を提示する。

*万葉〔8C後〕二〇・四四二五「防人に行く波(ハ)誰が背と問ふ人を見るがともしさ物思(も)ひもせず(防人の妻)」

*源氏〔1001~14頃〕帚木「右の大臣のいたはりかしづき給ふすみかは、この君もいものうくして」

*今昔〔1120頃か〕五・二〇「師子は、猶音を聞くそら諸の獣、皆、心を迷はし肝を碎て、半(ななかば)は死ぬる者也」

*徒然草〔1331頃〕一「御門の御位はいともかしこし」

㊧連用語を対比的に提示する。

*古事記〔712〕上・歌謡「青山に 鶯(ぬえ)波(ハ)鳴きぬ さ野つ鳥 雉(きぎし)波(ハ)

響む 庭つ鳥 鶏(かけ)波(ハ)鳴く」

* 万葉(8C後)一・二「国原波(ハ) 煙立ち立つ 海原波(ハ) かまめ立ち立つ(舒明天皇)」

* 万葉(8C後)四・六三二「目に破(ハ) 見て手に破(ハ)とらえぬ月のうちの楓(かつら)の如き妹をいかにせむ(湯原王)」

* 古今(905~914)春上・一「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける(紀貫之)」

* 枕(10C終)三・正月一日は「得たるはいとよし、得ずなりぬるこそいとあはれなれ」

①対比すべき事柄を言外におくことにより強める。

* 万葉(8C後)五・八二一「青柳梅との花を折りかざし飲みての後波(ハ) 散りぬともよし(満誓)」

* 万葉(8C後)八・一六〇七「風をだに恋ふる者(は)ともし風をだに來むとし待たば何か歎かむ(鏡王女)」

* 徒然草[1331頃]二「おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす」

②「Aが…する(である)一方、BはBで…する(である)」の形で、Aの行為・状態に対して、Bが独自に類似した行為を行なう(類似した状態である)ことを表わす。「この件は警察も捜査に着手したが、検察は検察で独自に動きはじめていた」「ここは冬は冷え込むし、夏は夏でとても暑い」

②複合動詞の中間に入り、あるいは活用語の連用形・副詞などを受けて強調し、打消または逆接の表現に続く。

* 万葉(8C後)九・一八〇七「髪だにも 掻き者(は)梳(けづ)らず(虫麻呂歌集)」

* 万葉(8C後)一六・三八七五「出づる水 ぬるく波(ハ) 出でず(作者未詳)」

* 万葉(8C後)一七・三九四一「鬚(うぐいす)の鳴くくら谷にうちはめて焼け波(ハ) 死ぬとも君をし待たむ(平群氏女郎)」

* 古今(905~914)恋一・四九二「吉野河岩きり通し行く水の音にはたてじ恋ひは死ぬとも(よみ人しらず)」

* 拾遺(1005~07頃)か)雑春・一〇一三「年ごとに咲きは変はれど梅の花あはれなる香は失せずぞありける(よみ人しらず)」

* 史記抄[1477]一八・龜策列伝「見つけはすれども、捕はえせぬそ」

* 四河入海[17C前]一九・二「年の内なれば雪はふりはふれども」

③「ずは」の形で用いられた上代の特別用法。

④「…は(には・ことは)…が」の形で同じ形容詞・形容動詞・助詞をうけて、その観点・次元については…であるということが認められるが、その意義を減少させるような要素もある、ということを示す。「…は…が」の形では、形容動詞は初めのは語幹、後のは終止形を用いる。「このあたりは静かは静かだが駅からは遠い」「この時計は動くには動くが正確でない」

- * 夜行巡査[1895]〈泉鏡花〉三「縁女(えんぢょ)もさ、美しいは美しいが、お前にゃ星目(せいもく)だ」
- * 病牀苦語[1902]〈正岡子規〉「旨い事は実に旨いものであるが、其句法が一本筋であるだけに幾らか変化に乏しい処がある」
- * 都会の憂鬱[1923]〈佐藤春夫〉「小遣錢も欲しいには欲しいが」
- * 蓼喰ふ虫[1928~29]〈谷崎潤一郎〉六「行きたいことは行きたいんだけど、まだ宿題がやってないしなあ」
- * 真空地帯[1952]〈野間宏〉三・六「上等兵に進級したときはうれしいことはうれしかったし」

㊦形容詞および打消の助動詞「ず」の連用形を受け、仮定条件を表わす。

- * 万葉(8C後)一八・四〇三九「音のみに聞きて目に見ぬ布勢の浦を見ず波(ハ)上(のぼ)らじ年は経ぬとも(田辺福麻呂)」
- * 古今(905~914)春上・一四「鶯のたによりいづるころなくは春來ることをたれか知らまし(大江千里)」
- * 古今(905~914)雑下・九八二「我が庵はみわの山もと恋しくはとぶらひ來ませ杉立てるかど(よみ人しらず)」
- * 天草本伊曾保[1593]イソポの生涯の事「モシ ノミツクサセラレズ ua (ワ) ナント」

㊧連体修飾の文節を受け、対比的に被修飾語との関係を強める。

- * 方丈記[1212]「一条よりは南、九条より北」

< 日本国語大辞典 Web 版 >

http://nikkoku.japanknowledge.com/cgi-bin/common.cgi?Key=00000000000036777900&CONFFILENAME=common.conf.nikkoku&HANI=0&JYOKEN=3&TEMPLATE=honmonA.html&Search_Query=%A4%CF&JCODE=EUC

17) 次の通りである。

[係助]名詞、名詞に準じる語、活用語の連用形、助詞などに付く。

- 1 判断の主題を提示する意を表す。「犬一動物だ」「教育一国民の義務である」「黒牛潟潮干の浦を紅の玉裳裾引(すそび)き行く一誰(た)が妻」(万・一六七二)
- 2 ある事物を他と区別して、または対比的に取り立てて示す意を表す。「風一強いが、日一照っている」「夕されば小倉の山に鳴く鹿一今夜(こよひ)一鳴かず寝(い)ねにけらしも」(万・一五一一)
- 3 叙述の内容、またはその一部分を強調して明示する意を表す。「喜ばずに一いられない」「やがてわかって一くれるだろう」「死を恐れざるに一あらず、死の近きことを忘るるなり」(徒然・九三)
- 4 (文末にあって)感動・詠嘆を表す。…ことよ。…だなあ。…よ。「されど、門の限りを高う作る人もありける一」(枕・八)
- 5 (形容詞・打消の助動詞「ず」の連用形に付いて)順接の仮定条件を表す。…のときは。

…の場合は、…ならば。「駿(しるし)なきものを思はず——坏(ひとつき)の濁れる酒を飲む
べくあるらし」〈万・三三八〉
＜デジタル大辞泉＞

18) 大辞林 提供:三省堂。

- 1 特に一つの物事をとりあげて提示する。「お酒—ぼくが買う」「食事—もうすんだ」
- 2 題目を提示して、叙述の範囲をきめる。「象—鼻が長い」「ぼく—学生だ」「今日—よい天気だ」
- 3 二つ以上の判断を対照的に示す。「行き—よいよい、帰り—こわい」「親に—孝行、友人に—信義」
- 4 叙述を強める。〔補説〕格助詞・副詞などに付いて意味や語勢を強める「たいてい—、そのまま帰る」「君と—もう会わない」
〔補説〕動詞・形容詞の連用形、および助詞「て・で」に付いて一続きの叙述の一部分を強調する。「絶対に行き—しない」「なるほど美しく—ある」「まだ書いて—いない」「真実で—ない」
- 5 〔補説〕「…(で)は…(だ)が」の形で譲歩の気持ちを表す。活用語の連用形に付くこともある。「雨も、降り—降ったが、ほんのわずかだ」「ごめんどうで—ごさいますが」
- 6 動作・作用の行われる条件・事態を表す。現代語では「ては」の形で用いられるが、古語では「ずは」「くは」「しくは」などの形をとることもある。「不正があつて—ならない」「おこられて—大変だ」「会社として—万全の備えをするつもりです」「忘れて—夢かと思ふ〔出典：伊勢 83〕」「あらたまの年の緒(お)長くあひ見ず—恋しくあるべし〔出典：万葉 4408〕」「鶯の谷よりいづるこゑなく—春春ることをたれかしらまし〔出典：古今(春上)〕」「恋しく—形見にせよとわが背子が植ゑし秋萩〔出典：万葉 2119〕」
- 7 文末にあつて、終助詞的に用いられる。体言や活用語の連体形に接続して、感動の意を表す。よ。「はも」「はや」などの形をとることがある。「歯固めの具にももてつかひためる—〔出典：枕草子 40〕」「あはれ、それを牽り鎮め給へりし—や〔出典：大鏡(道長)〕」
- 8 (文末にあつて終助詞的に用いられ)話し手自身に対して、念を押すような気持ちでの詠嘆を表す。「すはよい—とて追たそ〔出典：史記抄 3〕」「又五十字、百字有る歌もあらう—さて〔出典：狂言・萩大名(虎寛本)〕」

〔補説〕〔7〕は上代では「はや」「はも」の形をとる。〔8〕は中世以後の用法。近世では「わ」と表記されることが多くなり、現代語で主として女性が用いる終助詞「わ」の源流となる。

- 19) 集英社国語辞典 1993年6月 1356ページ。
- 20) 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版 1991年2月 41ページ。
- 21) 亀井孝、河野六郎、千野栄一 編著『言語学大辞典 第2巻世界言語編(中)』三省堂、1989年9月10日、日本語の項目で「現代語文法」を寺村秀夫が記述する。
- 22) 『日本語文法大辞典』(明治書院 平成13年3月)「が」の項目、119ページ、山口明穂執筆に、格助詞「が」を主格の助詞として文法説明する時期について、研究史における近代以降、明治時代の文典の文法記述に着目する。